

# 興福寺

第1期境内整備事業にともなう発掘調査概報 I



1998

興福寺



調査区全景（中金堂前より撮影、奥は南大門跡）

# 序

興福寺は、平成22年（2010）に創建1300年を迎える。この記念すべき年が視野に入ってきた平成3年より、当山では学識経験者各位からなる興福寺境内整備委員会を設置し、きわめて雑然とした印象の境内を整備し、可及的に創建当初の典雅な景観を再構築するべく、種々の問題を検討していただいている。

平成9年6月、当山は、その成果である境内整備構想の概要を発表し、さらにそれを成文化して、同10年2月に『興福寺境内整備構想』として刊行した。これは、当山の今後数十年にわたるであろう境内整備事業についての基本方針を世に問うたもので、概ね好感をもって受け止められたと理解している。

こうした基本構想に基づき、平成10年度から同19年度までの10年間に境内整備事業の第1期とし、去る平成10年10月、奈良国立文化財研究所のご協力により中門跡の発掘調査に着手して境内整備事業をスタートさせた。

今回の発掘調査により、中門の建物や基壇の規模あるいは回廊取付き部分の解明など、学術的に貴重な知見を得た。本書は、それら発掘調査の概要を報告するものである。

平成11年9月

興福寺貫首 多川 俊映

## 目次

序	
目次	
1 緒言	3
2 調査にいたる経緯	4
3 調査の経過と概要	6
4 興福寺の伽藍と中門	8
5 発掘調査の成果	12
(1) 建物・基壇上の遺構	12
(2) 基壇外周の遺構とその変遷	18
(3) 回廊内の遺構	23
6 出土遺物	26
(1) 瓦	26
(2) 土器	29
(3) 金属製品・銭貨	30
7 まとめ	31
報告書抄録	32

## 例言

1. 本書は、興福寺境内第1期整備事業にともなう平成10年度発掘調査概要報告書である。
2. 調査は、興福寺の委託を受けた奈良国立文化財研究所平城宮跡発掘調査部が、平成10年10月2日から平成11年1月21日にかけて実施した。
3. 調査は、山崎信二・高妻洋成・次山 淳・高橋克壽・古尾谷知浩・西山和宏が担当し、金 真成（大韓民国全南大学校湖南文化研究所特別研究員）、ウン・モニター、ペン・サムアン、ウン・ソックルチア（カンボディアプノンペン芸術大学卒業生・アンコール文化遺産保護共同研究招聘者）の参加を得た。
4. 調査ならびに本書の編集に際しては、奈良県教育委員会、奈良市教育委員会、京都国立博物館、奈良国立博物館、(株)飛鳥園、(株)国際航業、中造園の協力を得た。
5. 本調査は、平城宮跡発掘調査部の第297次調査として実施したもので、各遺構には平城京左京における調査基準に従い一連の番号を付した。発掘遺構図に付した座標値は、国土方眼第VI座標系による。
6. 本書の作成は、当調査部部长・田辺征夫の指導のもと調査員全員があたり、全体の討議をへて出土遺物の項を分担執筆とし、他の項の執筆と編集は次山淳がおこなった。遺構・遺物の写真は、佃幹雄および次山が撮影した。

# 1 緒 言

興福寺の起源は、天智天皇8年(669)に、中臣(藤原)鎌足夫人の鏡女王が、鎌足の病氣平癒を祈願して建立した山階寺にある。その後、藤原氏の氏寺として平城遷都とともに、平城京の外京にあたる左京三条七坊の地に移され、興福寺と号し、1300年あまりの間法灯を守り続けてきた。

平城遷都からまもなく造営が開始された興福寺は、藤原氏や朝廷の力などによって中金堂、北円堂、東金堂、五重塔、西金堂、講堂、食堂、三面僧坊と順次整備が進み、奈良時代の終わりには、ほぼ伽藍の完成をみる。さらに、弘仁4年(813)には、その後の観音信仰にともない興福寺を代表する信仰施設となる南円堂が建立され、また子院が寺中、寺外に建てられるなど、寺の規模はより拡充され、南都寺院勢力の中心的な存在となっていた。

長い歴史のなかで度重なる罹災と復興を繰り返し、盛時は堂塔その他の建物が170余宇といわれた興福寺も、明治維新後の神仏分離令、廃仏毀釈では壊滅的な打撃を受け、廃寺同然となった。築地堀、食堂、細殿、庫裡などは撤去され、五重塔、三重塔も売却の危機にあったが、明治14年(1881)に寺号の復号許可が出され、翌年には管理権が興福寺に返還された。

明治13年の太政官布達により、境内が公園として整備されはじめ、興福寺の再興への気運も高まり、往時の規模とは比較にならないものの、現在2万5千坪の境内地と、五重塔・北円堂など4棟の国宝建造物をはじめとして、彫刻、工芸品など26件の国宝、建造物、美術工芸品をあわせて44件の重要文化財を有し奈良を代表する寺院となっている。



第1図 中金堂院全景(五重塔より望む、左中央フェンス内が調査地)

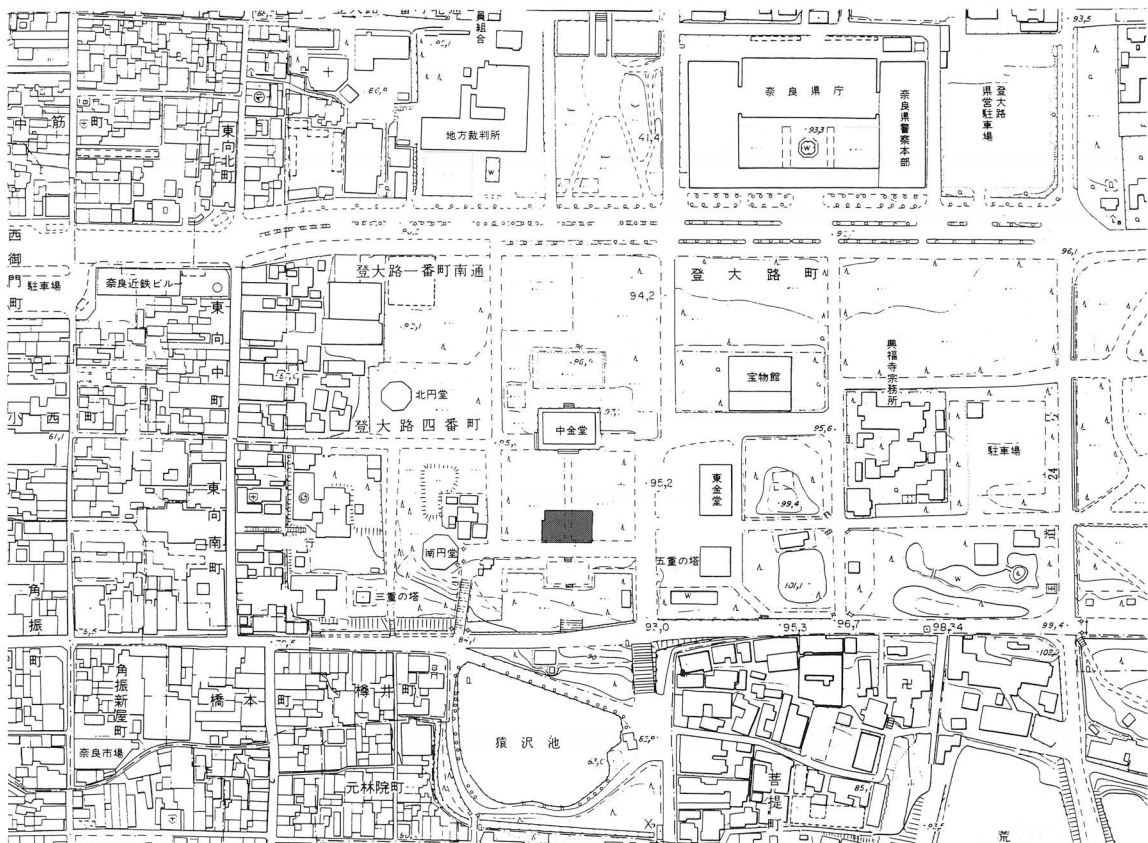
## 2 調査にいたる経緯

明治以降、興福寺境内は、主として公園また名勝地として今日の姿を整えてきたが、史跡地としてみれば埋もれたままの遺構も多く、往時の伽藍配置を理解することは困難なものとなっている。また、昼夜を問わず人々が往来できるため、国宝建造物等の保存管理上好ましくない点もみられる。

このような観点から、興福寺では、境内の歴史的背景を踏まえつつ、名勝奈良公園西部の核的空間としての姿を失うことなく、また史跡地としても、その本来の価値が顕在化でき、ひいては奈良公園全体の価値を高めることができるよう環境整備を図ることを基本理念とする「興福寺境内整備構想」を策定した（『興福寺境内整備構想』興福寺 平成10年2月10日）。

この構想に基づき、平成10年度から平成19年度までの10年間で第1期整備事業期間として設定し、旧境内主要堂宇地区の中金堂、中門・回廊、南大門、および周辺地区を対象に遺構等の整備をおこなうこととした。失われた建物跡の遺構は、発掘調査により明らかにし、その保存を計るとともに、名勝地としての整備を前提に、築造当時の姿に復元、あるいは規模、配置等の表示を計画している。

本調査は、この整備事業に伴う発掘調査年次計画の第1年次にあたる。調査地は、年次計画案にもとづき、中門全域と東西に取り付く南面回廊の一部を含む東西34m、南北24mの816㎡を当初設定した。その後、南面回廊の桁行き柱間を確認するために調査区西側を東西1.5m、南北17mの範囲で拡張し、最終的な調査面積は、841.5㎡である。発掘調査は、平成10年10月2日から開始し、平成11年1月21日に終了した。



第2図 興福寺旧境内地と発掘調査地位置図（1:5000）

興福寺境内整備委員会（平成11年3月31日現在）

座長 鈴木嘉吉 財団法人文化財建造物保存技術協会理事

委員（50音順）

青山 茂 帝塚山短期大学名誉教授  
牛川喜幸 長岡造形大学教授  
岡田英男 奈良大学教授  
近藤公夫 神戸芸術工科大学教授  
田中 琢 奈良国立文化財研究所所長  
坪井清足 財団法人大阪府文化財調査研究センター理事長

興福寺境内発掘調査小委員会

委員（50音順）

河上邦彦 奈良県立橿原考古学研究所調査研究部長  
菅谷文則 滋賀県立大学教授  
田辺征夫 奈良国立文化財研究所平城宮跡発掘調査部長  
森 郁夫 帝塚山大学教授  
森下恵介 奈良市教育委員会文化財課係長

オブザーバー

樫平隆行 奈良県企画部風致保全課主幹  
小出次郎 奈良県公園管理事務所長  
関川尚功 奈良県教育委員会文化財保存課課長補佐  
田中哲雄 文化庁記念物課主任文化財調査官  
徳永政道 奈良県企画部文化観光課長  
森川倫秀 奈良市教育委員会文化財課主幹  
安川宣彦 奈良県教育委員会文化財保存課長  
柳雄太郎 文化庁記念物課主任文化財調査官  
吉井 博 奈良県教育委員会文化財保存課主幹

コンサルタント

真鍋建男 株式会社空間文化開発機構

興福寺

多川俊映 興福寺貫首  
森谷英俊 興福寺執事  
小西正文 興福寺庶務部長  
藪中五百樹 興福寺境内管理室長

### 3 調査の経過と概要

- 9月16日 発掘調査に先立ち調査地内の松を伐採（～17日）。
- 9月21日 重機による抜根（～22日）。東北隅の礎石を確認。
- 9月30日 基準点移動、発掘区縄張り。
- 10月2日 発掘調査開始。発掘区の北側から調査を始める。遺構面までの深度が浅かったため、表土より手掘り掘削をおこなう。土層観察用に推定棟通り位置に東西畦、調査区の東西に南北畦を設定。
- 10月7日 中門前参道にて、境内整備事業無魔成満祈願法要を執り行う。その後、本坊において境内整備事業ならびに発掘調査開始についての記者発表。
- 10月13日 表土掘削を終え、南端より折り返し。
- 10月23日 回廊内包含層の堆積状況確認のため、南北畦および東壁に沿ってサブトレンチを設定する。
- 10月26日 北端より折り返し掘削。包含層は、褐色土および茶灰色土を黄色砂整地層上面まで掘削。黄色砂上面において遺構検出。茶灰色土中で土師器小皿の集中（SX7428）を検出。
- 10月27日 SX7428の精査、写真撮影。サブトレンチでB期基壇外装を確認。
- 10月28日 垂木先金具出土。出土状況実測、写真撮影、取り上げ。
- 10月30日 基壇上の精査開始。
- 11月2日 参道東辺の電線埋設溝を掘り下げ、基壇築成状況の確認。



第3図 発掘調査前の中門跡（南大門基壇上より、奥は中金堂）



- 11月5日 基壇周辺の乱石出土状況、畦間の細部、上層の瓦溜SX7427を撮影。
- 11月6日 瓦溜SX7427の取り上げ。
- 11月9日 カンボディア研修生3名参加。
- 11月10日 南面西回廊SC7417の中門取り付き部以西の桁行きを確認するために、調査区西辺を東西1.5m、南北17m拡張。西壁、畦の実測、取り外し。下層の瓦溜SX7426検出。
- 11月13日 東側南北畦の下より台石SX7424出土。
- 11月17日 調査指導委員会（現地にて）。
- 11月19日 調査成果についての記者発表。
- 11月21日 午後2時より現地説明会を中金堂前芝生にておこなう。見学者約800名。
- 11月25日 ラジコンヘリによる上空からの斜め撮影。クレーンによる写真測量。遺構撮影。
- 11月26日 クレーンによる全景撮影。地上撮影（～27日）。
- 11月30日 遺構の平面実測（～12月8日）。
- 12月8日 断ち割り調査開始。足場穴等の最終確認。
- 12月21日 小穴群SX7432の検出および掘り下げ。
- 1月8日 基壇外装の凝灰岩に強化剤を塗布。
- 1月13日 記録ビデオ収録。
- 1月20日 埋め戻し開始。
- 1月21日 発掘調査終了。



第4図 現地説明会風景（西北より）

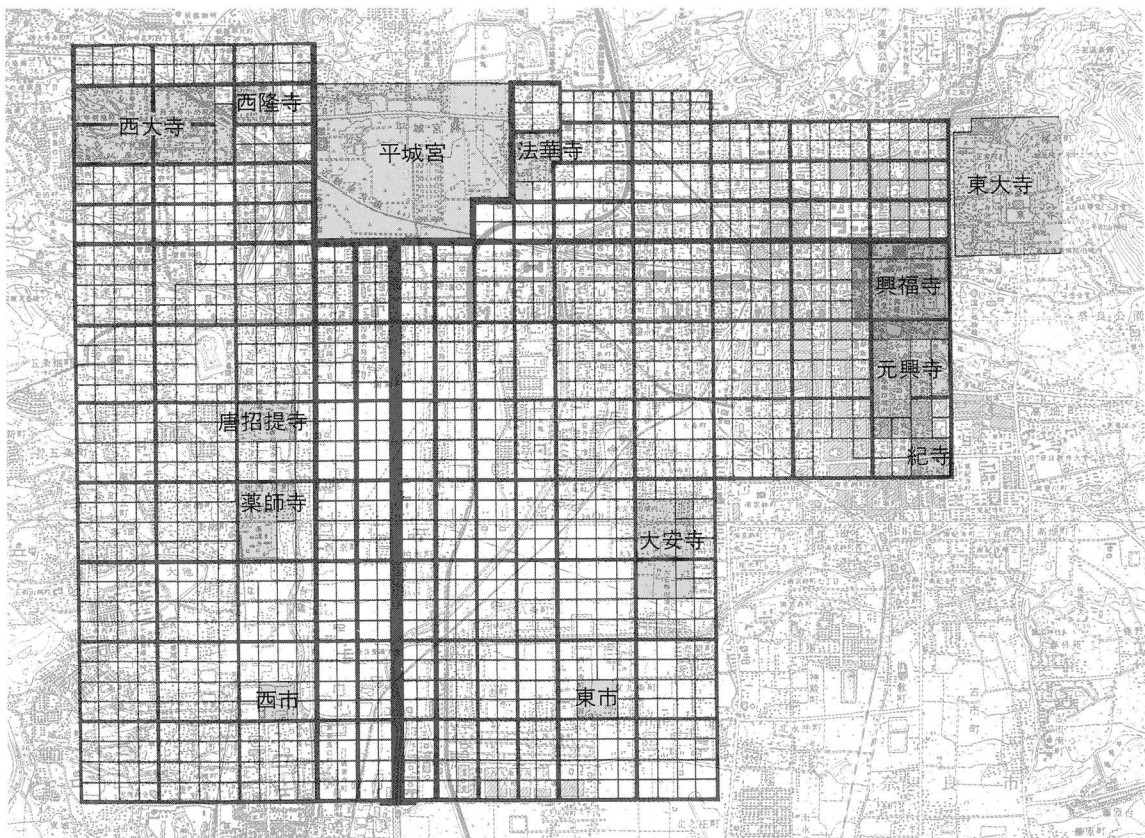
## 4 興福寺の伽藍と中門

寺地と伽藍 興福寺は、東に張り出した平城京外京の東辺、左京三条七坊、現在の奈良市登大路町に位置する。興福寺の寺地について『興福寺流記』中の「延暦記」は、「東限京極路。西限大路。南限元興寺北小道。北大路」とする。東の京極路は東七坊大路、西は六坊大路、北は二条大路（当初は1町南の小路まで）で、南は三条大路をこえ菩提川の流れにあたる。左京三条七坊と四条七坊の北4町を占めていた。猿沢池を含む南4町は花園であり、西外側にも2町または4町分の菓園があった。

平城京における興福寺の建立は記録にないが、和銅3年(710)の平城遷都後まもない和銅年間から養老年間の頃と考えられている。養老5年(721)に北円堂、神亀3年(726)に東金堂、天平2年(730)に五重塔、天平6年(734)に西金堂、天平18年(746)に講堂がつくられ、天平年間には中心伽藍の姿が整う。やや遅れて平安時代の弘仁4年(813)には南円堂が建立された。

伽藍中枢部は、中軸線上に南から南大門、中門、中金堂、講堂とならび、中門から発する回廊が金堂に取り付く。この中門と中金堂を結ぶ回廊に囲まれた区画を中金堂院と呼ぶ。金堂と講堂の間には、東に経蔵、西に鐘楼がおかれ、これを取り囲むように東室(11世紀より中室)、西室、北室(上階・下階)の三面僧房がある。講堂の東には食堂があり東室と軒廊で結ばれ、食堂の南には細殿がおかれた。

中金堂院の東には、西面する東金堂と、その南に五重塔がある。これらを囲んで回廊が西側と北側に、築地塀が東側と南側にめぐり、この区画は東金堂院と呼ばれている。東金堂・五重塔と対称の位置には、それぞれ西金堂と南円堂が位置する。



第5図 平城京と興福寺の位置 (1:50000)

中門の歴史 中門の建立は、中金堂の建設とともに創建当初の頃と考えられる。『興福寺流記』は、その様子を「一 南中門一基。長五間。々別一丈五尺。宝字記長七丈八尺。広二丈八尺。宝字記延暦記同。上二記架端皆用金泥裁銅。(中略)延暦記云。(中略)四方各小門二門。宝字記云。小門八口云云。」と伝える。この記述から、中門建物は、桁行5間78尺、梁行2間28尺、南大門と同一規模と推定された(大岡實『南都七大寺の研究』中央公論美術出版 1966)。享保焼失前の寺蔵古図によれば、中門は単層(一重)で、屋根は切妻造り、正面5間の中央の3間を扉とし、その前面に3間分の階段をつける。回廊は、梁行2間等間で中央の柱筋に連子窓をもうけた複廊である。

平安時代以後、中金堂院に限ってみても、永承1年(1046)の類焼にはじまる7度の火災に遭遇し、6度の再建を重ねている。以下にその経過を辿っておこう。

① 永承1年(1046)12月24日

興福寺火災。金堂。講堂。西金堂。東金堂。南円堂。鐘楼。経蔵。南大門。東西上階僧坊焼亡。

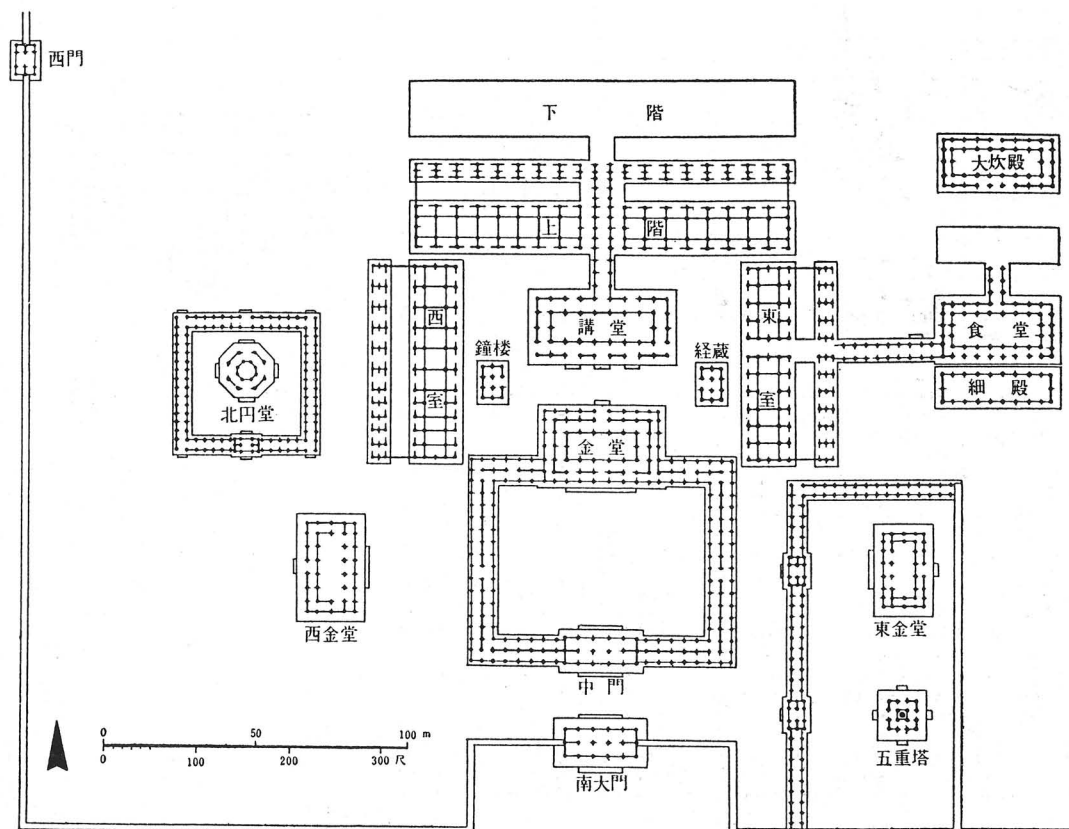
但北円堂并正倉院。金堂釈迦。南円堂不空羂索。西金堂仏等取出。 『扶桑略記』同日条  
中金堂院を中心とする建物および南円堂の再興については、『造興福寺記』に詳細な記録がみえる。再建供養は、永承3年(1048)3月2日におこなわれた。

② 康平3年(1060)5月4日

去夕亥剋。寺家焼亡。金堂并回廊。中門。大門。維摩堂。三面僧房為灰燼。

『康平記』同年5月5日条

再建供養は、治暦3年(1067)2月25日におこなわれた(『扶桑略記』同日条)。



第6図 奈良時代の興福寺伽藍配置復原

③ 嘉保3年(1096)9月25日

卯時許聞。此夜半興福寺有焼亡。火從東妻室僧房上出来。則付講堂。仍金堂南左右廻廊。中門。

南大門。鐘樓。經藏。講堂并三面僧房皆為煨燼由。 『中右記』同年9月26日条

永長1年(1096)12月15日に手斧始め、承德2年(1098)2月11日に棟上をおこない、康和5年(1103)7月25日に供養されている(『中右記』)。

④ 治承4年(1180)12月28日

注進。

興福寺中寺外。堂舎宝塔。神社宝蔵等焼失事。

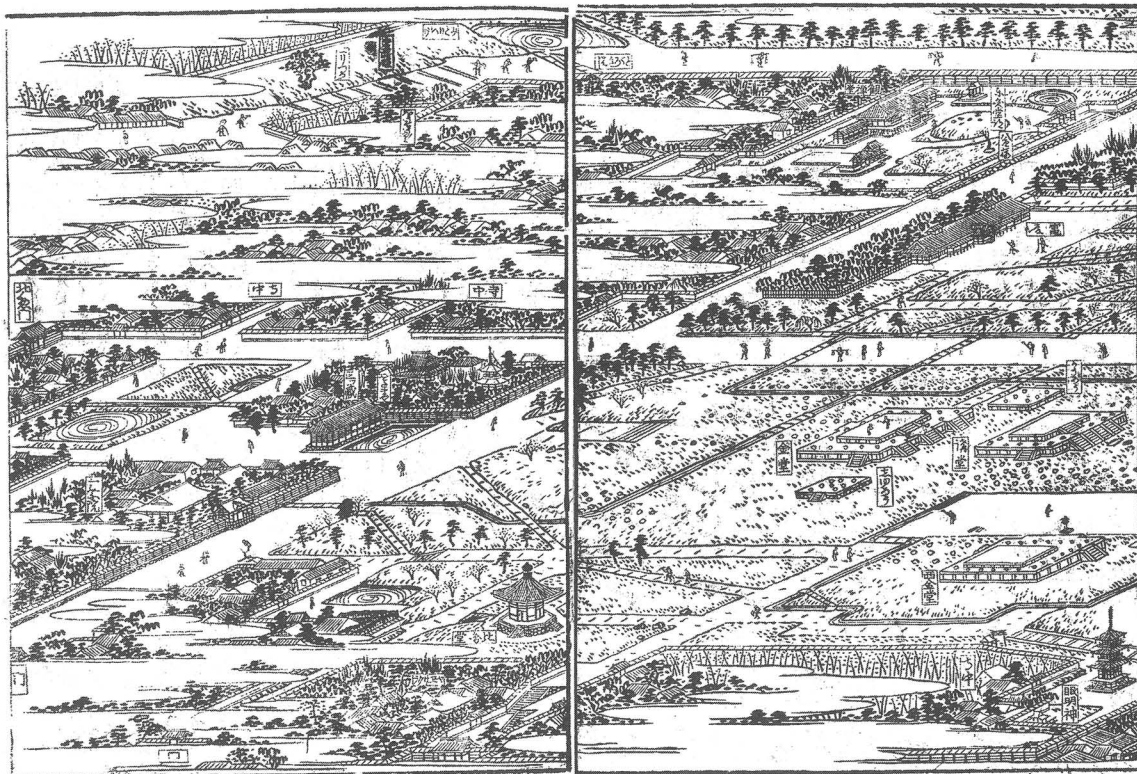
合

一 寺中。

金堂。講堂。南円堂。食堂。東金堂。西金堂。北円堂。東圓堂。觀自在院。西院。一乘院。大乘院。中院。松陽院。北院。東北院。発志院。觀禪院。五大院。北戒壇。唐院。松院。伝法院。真(言)院。円成院。皇嘉門院御塔。総宮。一言主社。滝蔵社。住吉社。鐘樓一字。經藏一字。宝蔵十字。大湯屋一字。(割注省略)

已上。堂舎三十四字。宝塔三基。神社四所。宝蔵。大湯屋等也。此外。三面僧房。四面廻廊。大小□門。□□□□房。諸院。不知其数。□炎□所□。尊教院内小房一字。角院内小房二字。窪院内小房二字許也。 『玉葉』治承5年1月6日条

治承5年6月15日には造寺官が任命され、諸堂の造営が全国に割り当てられた。建久5年(1194)9月22日に金堂の供養がおこなわれたが、中門・回廊については完成の年次が明らかでない。『春日神社文書』中の大江泰兼申状からは、回廊の完成は金堂供養に遅れた可能性が指摘されている。



第7図 『大和名所図会』(卷二 添上郡) にみられる興福寺の様子

⑤ 建治3年(1277)7月26日

興福寺炎上事。先清冷院ニ雷火在之。自其三面之僧房皆以焼失了。講堂。金堂。廻廊。中門。南大門。講師房此等皆焼畢。 『中臣祐賢記』同日条

弘安2年(1279)10月26日に金堂、講堂、中門などの上棟がおこなわれ(『興福寺略年代記』同日条)、正安2年(1300)12月5日に供養が行われた(『帝王編年記』同日条)。

⑥ 嘉暦2年(1327)3月12日

興福寺金堂。講堂。鐘楼。経蔵。廻廊。中門。南大門。南円堂。西金堂悉焼失了。

『法隆寺別当次第』顯観僧正項

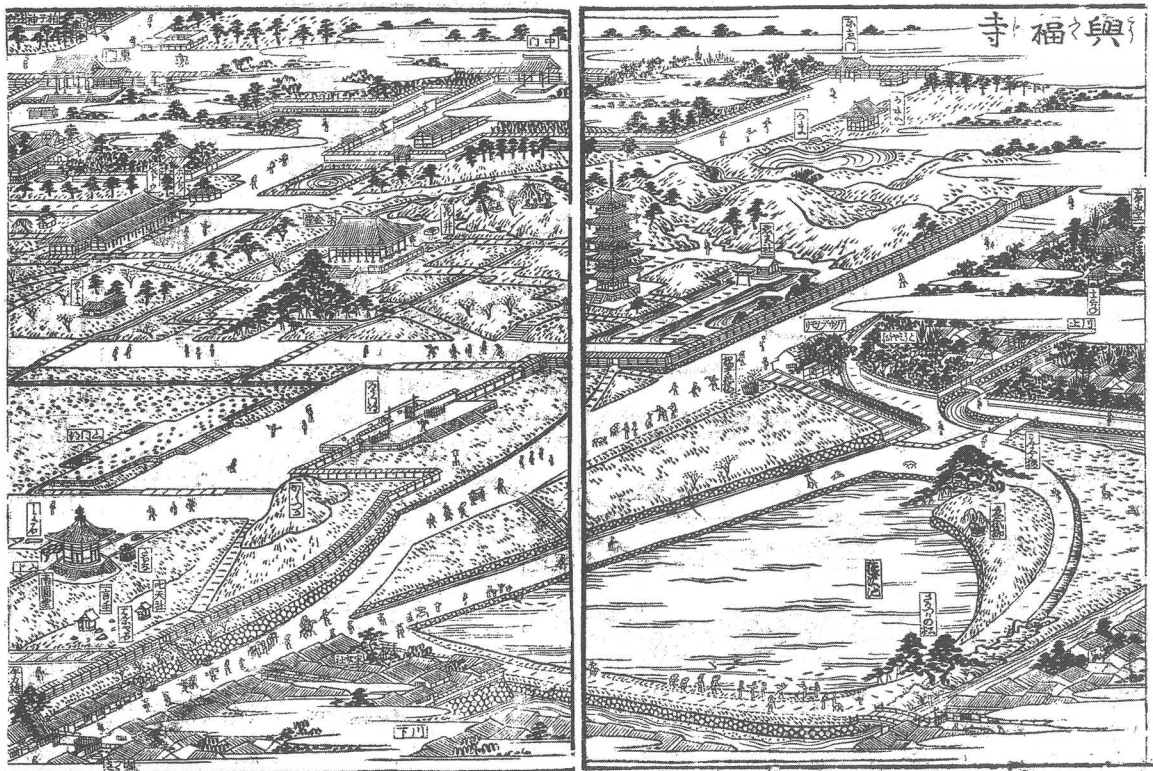
この再建の供養は、応永6年(1399)3月11日(『大乘院日記目録』同日条)に行われているが、建物はこの間に順次復興されていったようである。こののち、宝永4年(1707)には、中金堂院の西面回廊が倒壊し、他の建物も被害を受けている(『興福寺伽藍春日社境内絵図』宝永5年)。

⑦ 享保2年(1717)1月4日

享保二年正月四日亥の剋、南都興福寺講堂より出火し諸堂炎焼す。講堂。金堂。西金堂。南円堂。南大門。中門。廻廊。西室。北室。中室。鐘楼。鼓楼。(割注省略) 『塩尻』巻63

火災後の再建は、南円堂が寛政1年(1789)に完成、中金堂が文政2年(1819)に再建されたにとどまる。寛政3年刊行の『大和名所図会』は、南円堂完成後、金堂造営までの姿を伝えるものであろう。

この7度目の火災の後、中門は再建されることなく、その基壇跡は明治期の荒廃をへて、奈良公園の芝地となった。明治18年に撮影された写真によれば、この時点ですでに中門基壇は削平されている。中金堂に向かう参道が敷設され、その両側に松の樹が大きく育っており、調査前の風景に近い姿をみることができ(『奈良公園史』奈良県 1982、頁106 写真47)。



## 5 発掘調査の成果

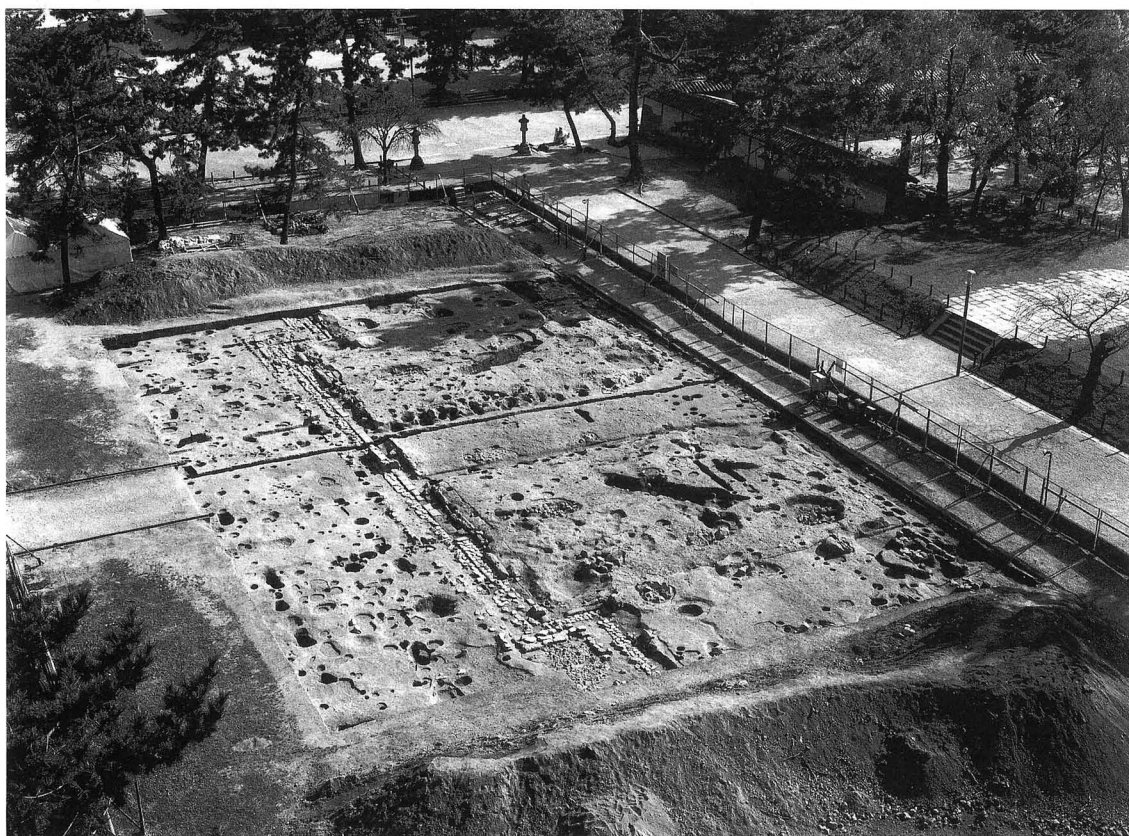
### (1) 建物・基壇上の遺構

中門の遺構面は、最も遺存の良好な棟通りの東西部分において、現地表下約5cmで基壇土に達する。しかしながら中央間に相当する部分では東西約6m幅で参道敷設による削平を受けており、近世以降の松の植樹による攪乱も少なからず存在するため、基壇の残りは必ずしも良好であるとはいえない。

参道東辺の電線埋設溝およびトレンチ調査の結果、中門地区の旧地形は、調査区東半で東南に向かう谷がはいっており、調査区南端中央、階段付近で現地表面から約90cm下、同東端の回廊北側通り付近で110cm下において、旧表土面を確認した。この谷を地山の切土により埋め立て、整地の後、基壇築成をおこなっている。参道西辺がおおむね傾斜の変換点になっており、基壇西半の基底部は地山を削り出して形成する。中門と回廊の境には、帯状にバラス混じりの土をおいている。

中門SB7415 最も遺存の良好な中門基壇上面の標高は、95.20～95.30mで、北階段地覆石上面との比高差約0.4m、調査区南端で検出した焼土面との比高差は約0.6mである。礎石はいずれも花崗岩で、基壇上に3基が遺存し、他の15基はすべて抜き取られるか、破碎されている。現存する礎石の大きさは上面で約1.2×1.2mをはかる。径30～40cmの河原石を根石とし、その上に直接据えつける(第10図1)。抜き取り穴の基底部にも根石の遺存を確認した。

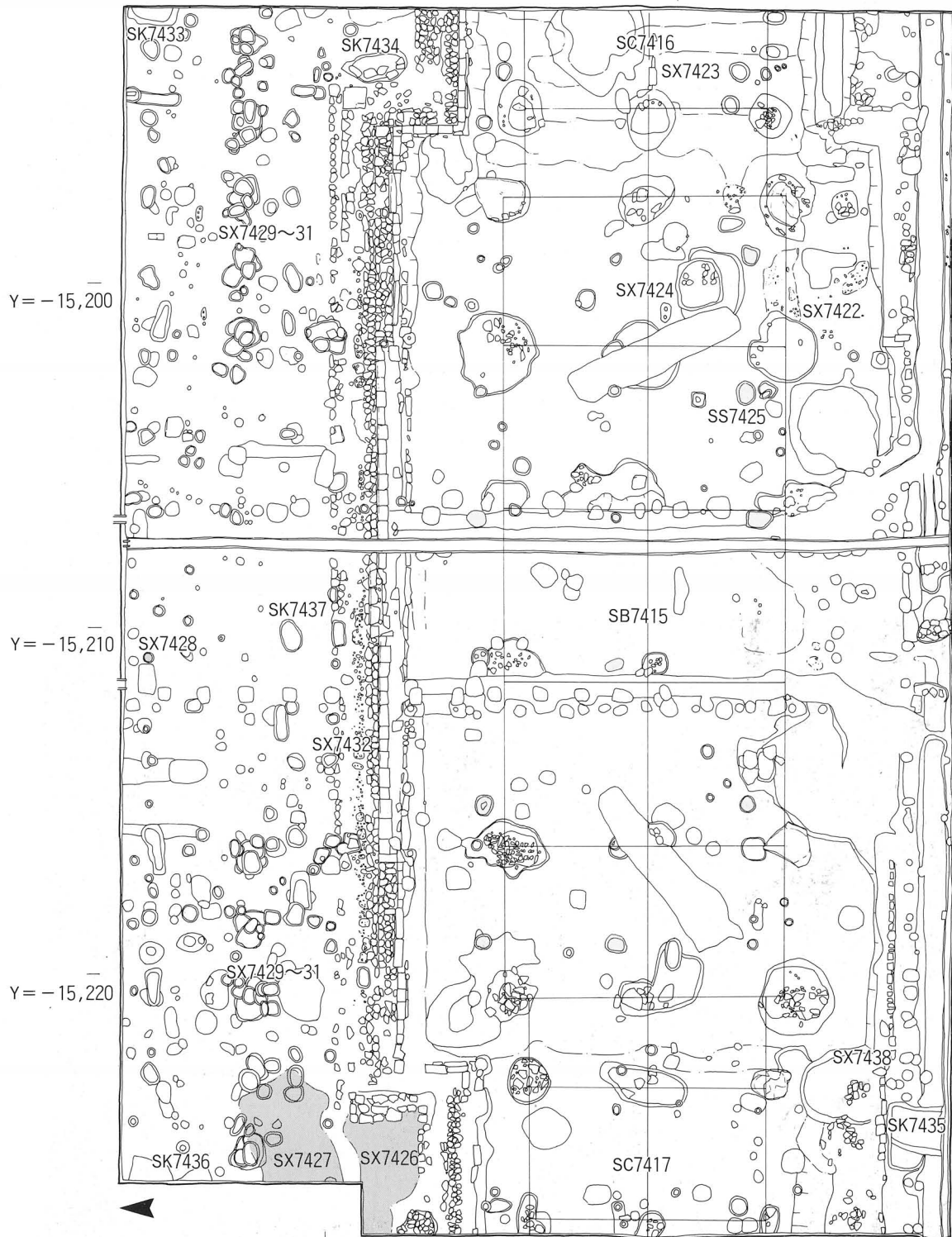
基壇最上面では、多量のバラス・焼土・土器・瓦を含む積みなおし基壇土が認められた。14世紀代の土器が含まれることから、応永の再建にともなうものであろう。東南端間の南側通りの柱間では、その



第8図 調査区全景(西北より)

X = -146,465

X = -146,475



第9図 発掘調査遺構図 (1:180)

上面に凝灰岩切石の痕跡が認められた。端間南面の金剛柵地覆石と考えられる (SX7422)。

礎石および抜き取り穴から推定される中門の建物規模は、東西23m (78尺)、南北8.4m (28尺) で、桁行5間、梁行2間に復原できる。柱間の寸尺は、桁行中央3間が16尺等間、両端間が15尺等間、梁行が14尺等間となる。基壇は、その平面規模が東西27m (92尺)、南北14m (48尺)、基壇の出は、平方向が10尺、妻方向が7尺となる。階段の幅は、中央3間分である。

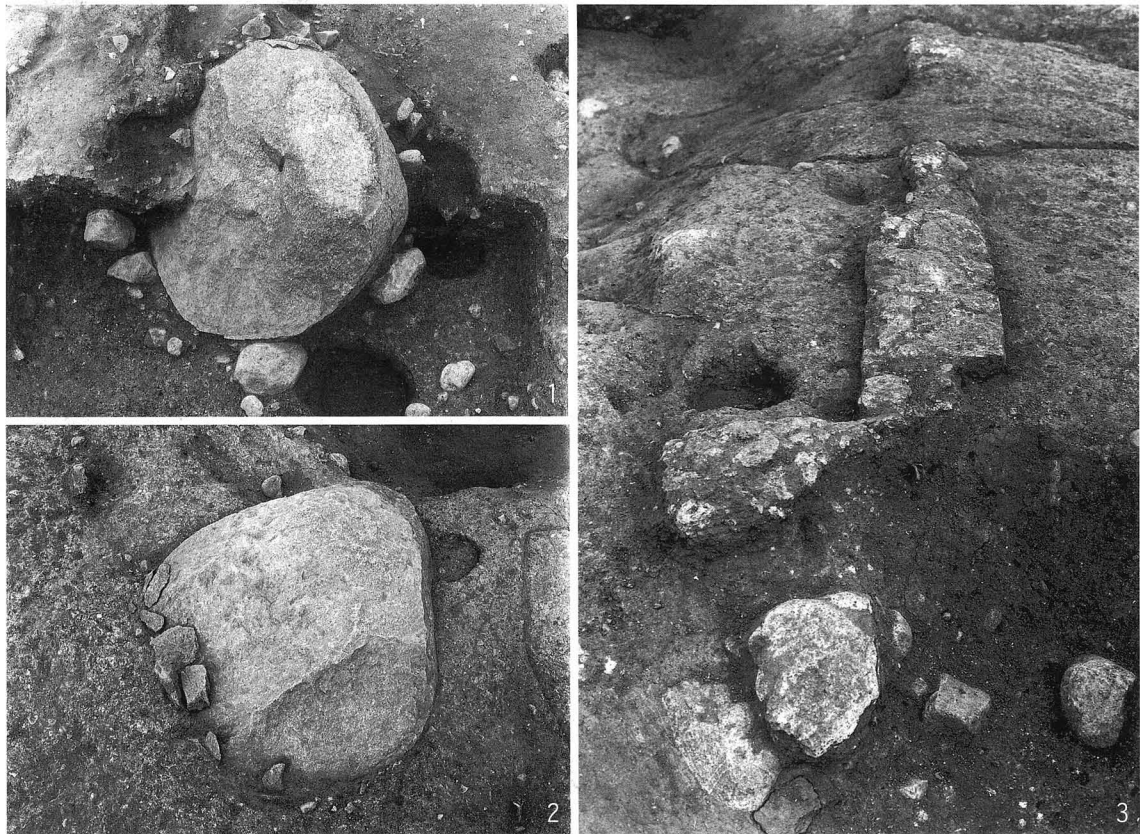
なお、北側柱筋に沿って東西方向にいたれたトレンチにおいて、基壇築成土の下層で2基の柱穴を検出した。

南面回廊SC7416・7417 南面回廊基壇上面の標高は、東回廊SC7416で94.9～95.07m、西回廊SC7417で95.07～95.12mである。中門基壇の東西縁に最初の柱を設け中門に取り付く。礎石は花崗岩で、西側基壇取り付け部で1基が遺存し、他は東西合わせて8基の抜き取り穴を確認した。

SC7417では、基壇積土はほとんど遺存していなかったが、SC7416では、基壇土の中に焼土を含む層があり、基壇土自体の積みなおしが観察された。調査区東端で検出した凝灰岩切石による回廊棟通り地覆石SX7423は、この積みなおし土の上面に据えられたものである (第10図3)。

礎石等の位置から推定される回廊の建物規模は、南北7.1m (24尺)、梁行12尺2間等間、中門取り付け部の桁行2.6m (9尺)、SC7417において確認した西の桁行4.1m (14尺)となる。基壇幅は10.6m (36尺)、基壇の出は6尺である。

また、中門および南面回廊基壇上で足場穴と考えられる複数の小柱穴を確認した。足場SS7425は、桁行5間、梁行2間、柱間は約4mで、柱穴のひとつから14世紀後半の瓦質火鉢が出土した。



第10図 中門礎石・回廊棟通り地覆石

1 南東隅礎石 2 北東隅礎石 3 回廊地覆石SX7423 (西より、手前は礎石抜き取り穴)





第11図 中門・南面回廊基壇全景

1 東より、奥は南円堂と西金堂跡 2 西より

従鬼(夜叉)像台石SX7424 中門棟通り東から2基目の礎石位置の東南に近接して、表面に円形の穴を2つ穿った花崗岩を、基壇に据え付けられた状態で検出した。上面は平坦で楕円形を呈し、東西(横)60cm、南北(縦)30cm、穴は径11cm、深さ20cm、心々間が27cmで東西方向に並ぶ。東の穴の中からは、銅・鉄製品が出土した。断ち割り調査の結果、この石の高さは28cm、上面よりもやや広めに掘った掘形の南に寄せて石を据え、拳大の石で北側から押さえている(第12図2)。

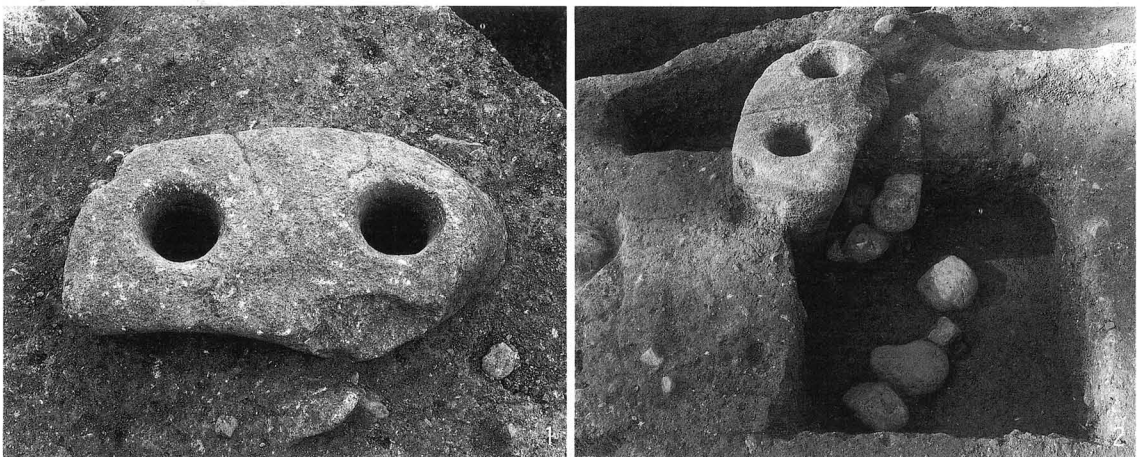
これと同様の穴をもつ石が、基壇西南部で地表に転倒していた。上面は横56cm、縦32cm、高さ28cmで上面には前者と同様に径11cmの円形の穴が2つ、心々間28cmで並ぶ。穴の深さはそれぞれ20cm、22cmである。このように、両者はきわめてよく似たつくりのものである。

興福寺蔵『肝要絵図類聚鈔』に収められた室町時代の大乘院門主尋尊大僧正自筆の古図を写したとされる伽藍古図には、中金堂院の一部について堂間の寸尺と、安置像の配置が記されている(『奈良六大寺大観』第7巻 興福寺1 岩波書店 1969、解説挿図3)。中門は、東西両端間の中央および四隅に小さな円を5つ描き、中央の円には「二天」と示す。

中門の安置像については、『興福寺流記』に、「在四王二軀従鬼八口。宝字記神王二鋪云云。延暦記云。従鬼各四口云云。」とあり、享保2年の火災後に書かれ、それ以前の様子を伝えるとされる『興福寺濫觴記』は、「東持国天 西増長天 八夜叉各立像。各長一丈四寸五尺 各八尺五寸。右各応永年中。春日大仏師成慶造之。」とし、当初から二天像と東西各4体の従鬼(夜叉)像が置かれ、その制が引き続き守られていたことを知ることができる。

また、治承以前のありかたを基本に描いたとされる京都国立博物館蔵『興福寺曼荼羅図』は、下段中央に中門および南大門を描くが(第13図)、中門の基壇上には、邪鬼を踏みつける二天像と東西に各三体の立像の従鬼がみえる(毛利久「興福寺曼荼羅と同寺安置佛像(上)(下)」『国華』778・780号 1957、京都国立博物館『興福寺曼荼羅図』1995)。

検出位置から、この石は中門に安置された従鬼像の台石のひとつであると考えられる。同様な形制の石が複数みられることもその根拠となろう。台石が像の両足の芯木を受ける穴をもつことから、像は塑像で、台石は奈良時代(創建時)に遡る可能性がある。また、穴の間隔と並びから像は等身大に近く、南面していたものと推定できる。



第12図 従鬼像台石SX7424

1 上面(北より) 2 据え付け状況(東より)

奈良時代の門に安置された像の台石の発掘例としては、薬師寺中門の事例がある。1982年の奈良国立文化財研究所による発掘調査では、桁行5間×梁行2間の中門両端間に2対の仁王像台石が4基確認された（奈良国立文化財研究所『薬師寺発掘調査報告』1987）。これらの石の上面には、それぞれ1つずつ芯木を受ける穴が穿たれており、その中からは、天禄4年（973）に火災で焼失した仁王像のものと思われる塑像片が大量に出土し、この像が塑像であったことを裏づけた。また、奈良時代の門の両端間に安置された塑像の例に、和同4年（711）の法隆寺中門金剛力士像をあげることができる（法隆寺『法隆寺重要文化財塑造金剛力士立像修理工事報告書』1965）。



第13図 『興福寺曼荼羅図』部分（京都国立博物館蔵、飛鳥園撮影）

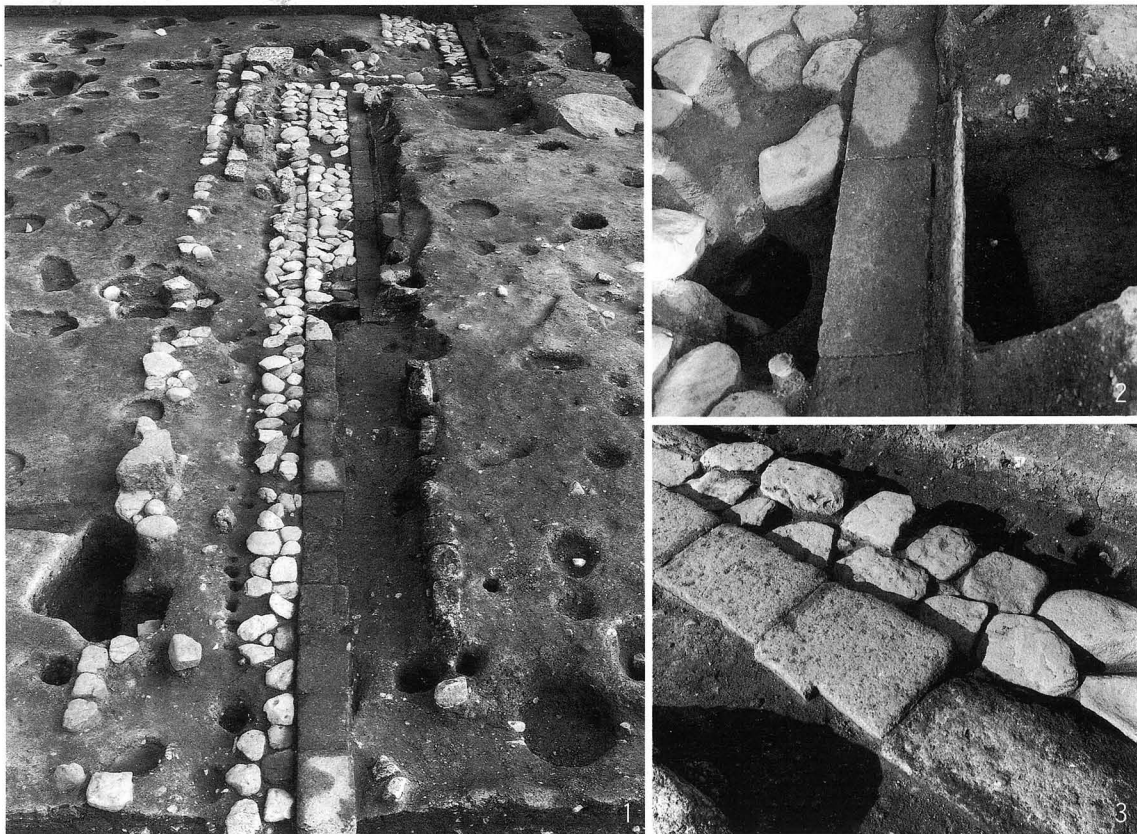
## (2) 基壇外周の遺構とその変遷

基壇の外周は、北側の遺存状況はおおむね良好であったが、南側についてはほぼすべての石材が抜き取られていた。なお、北側においても基壇外周に沿って、基壇崩壊土である橙褐色粘質土を埋土とする幅1～1.2mの溝が巡っており、その肩に多量の割り石が遺棄されていた。外装石材の抜き取りを示すものである。

基壇外周において、現在確認される最も古い遺構は、凝灰岩切石による壇正積基壇の一部と、これにともなう一連の遺構である。後述するように、この基壇外装は火災後の改修によるものと考えられ、この時期をB期とし、それ以前をA期として以下に基壇外周の遺構とその変遷を述べる。

B期 北側の基壇外装にあたる凝灰岩地覆石列と羽目石SX7418がある。地覆石は、長さ40～50cm、幅20cm、厚さ15cm前後の平面長方形のものを持ち、上面に溝等の加工は認められない。この地覆石に厚さ12cmの羽目石をのせる。羽目石の基部には高さ6cm、奥行き6cmの切り欠きがつくられており、これを地覆石の背面・基壇側にあてはめる（第14図2）。

階段は、中央3間分を占め、羽目石から地覆石北端までは、約70cmである。階段部分の羽目石は、基壇土を削り直接据え付けている。この階段の出にあわせ玉石を3列敷きならべた幅54cmの大走SX7419が、基壇の東西妻まで設けられる。その前面には、直線的に幅40cmの玉石敷きの雨落溝SD7420がとる。溝底の標高は、調査区西端で94.9m前後、東端で94.8m前後であり、水は西から東へ流れたものと考えられる。さらに雨落溝北側石の外側に幅66cmの玉石敷SX7421が、溝に向かってわずかな傾斜をもって巡る。西回廊SC7417の北側では、瓦溜SX7426と重複する。



第14図 基壇外周遺構検出状況(1)

1 基壇北側東半の外周（西より） 2 B期地覆石と羽目石 3 北階段地覆石の切り欠き

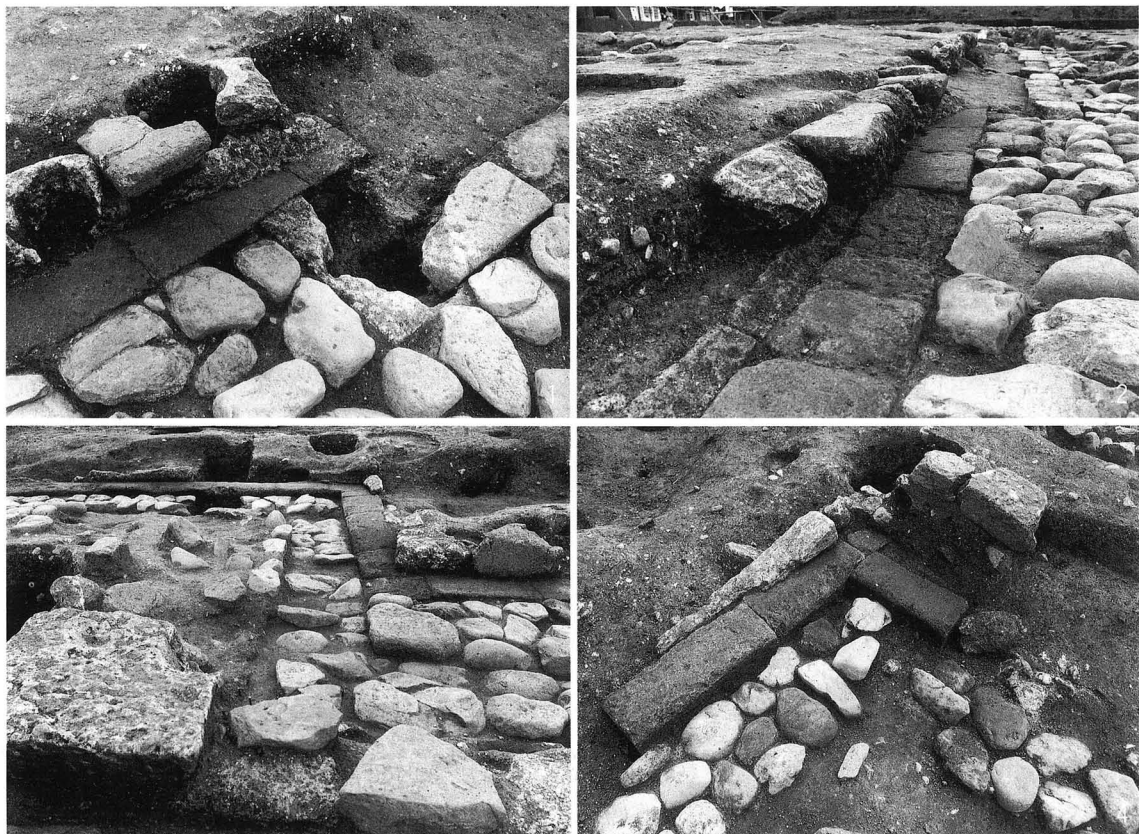
断面観察の結果、これらは一連の仕事であり、当初の基壇築成土および回廊内の凝灰岩片を含む黄色砂整地面を切り込んで据え付けられている。掘形埋土には、焼土あるいは炭化物を含む。また、階段地覆石は、北(外)面は直線に面を揃えているが、形状にばらつきがあり、隅に用いるような切り欠きのものを含む(第14図3)。さらに、地覆石の中には表面よりも裏面に著しい風化の見られるものがあり、石材の転用の様子がうかがわれる。B期は火災後の改修によるものと考えられた。

C期 B期の羽目石の上半を壊し、その上に厚さ30cm、高さ30cm前後の方柱状の凝灰岩切石を天のせのかたちでおく(第15図1・2)。また、雨落溝の側石、外周の玉石敷の一部を抜き取り、その上に凝灰岩切石をおく。雨落溝SD7420は、11世紀代の土器を含む焼土層によってすでに埋もれており、凝灰岩基壇の対面に雨落溝の葛石として凝灰岩切石をおいた可能性がある。

D期 凝灰岩地覆石との間に焼土を含む間層をはさんで、花崗岩の切石がのる(第17図1)。これは、長さ1.1~1.3m、幅20cmほどの蒲鉾形の花崗岩で、下面は平坦に調整され、曲面をなす上面は打ち欠きのまま未調整にちがいありかたを示す。羽目石として用いられていたものが、外面を下にして北側に倒れた可能性がある。また、C期に据えられた外周の凝灰岩切石の上に、大きさの不揃いな玉石を用いた石敷があらたにつくられる(第17図2)。

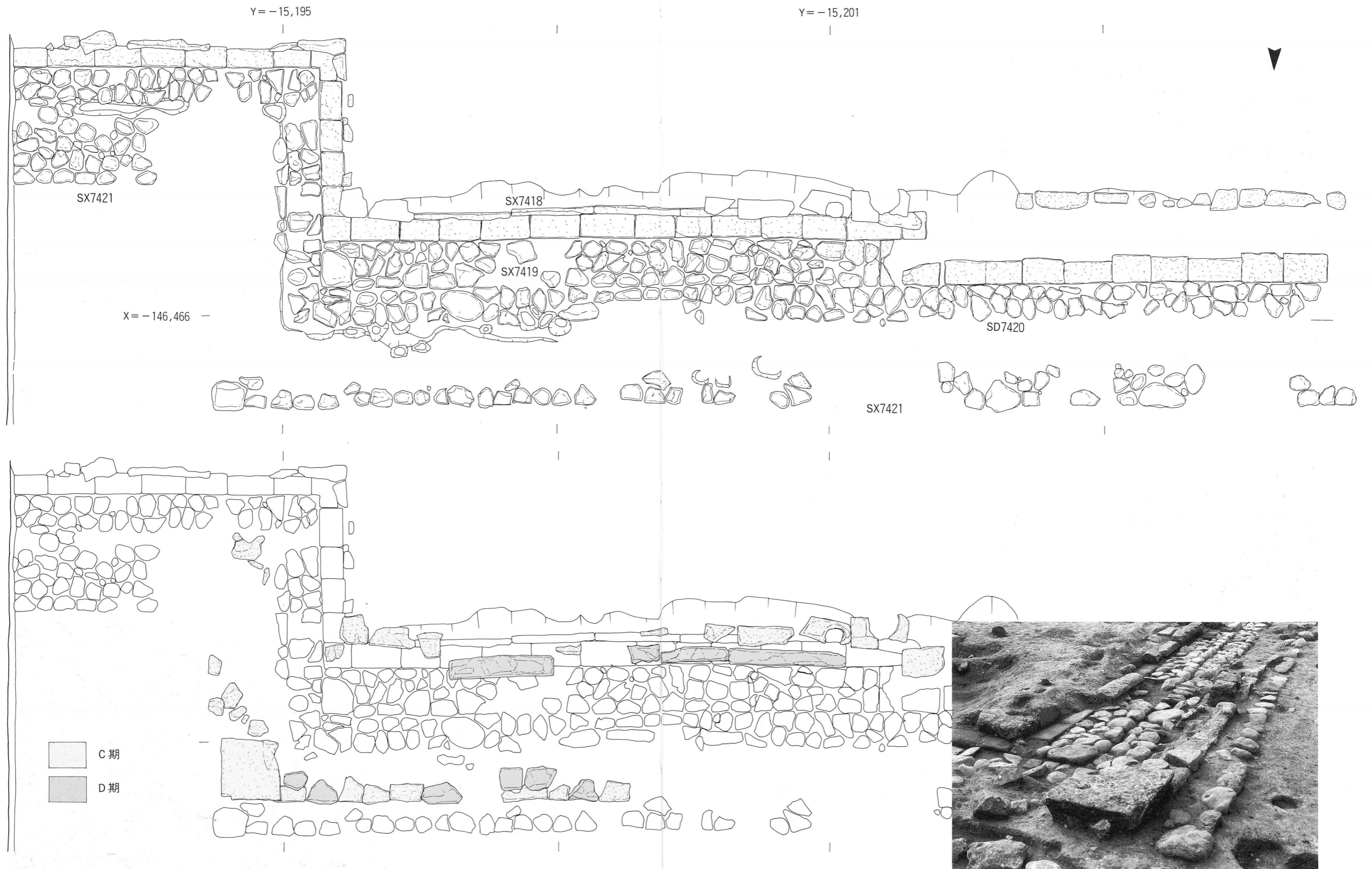
基壇南側は、ほぼすべての外装石材が抜取られていたが、階段東側の耳石地覆石が残存しており、凝灰岩地覆石の東南隅を切り欠き、花崗岩切石を据付けている様子が観察された(第17図3)。

E期 西側南縁では、中門および回廊基壇外周において、切石石列SX7438がつけられる(第17図4)。これらは、花崗岩基壇外装の抜き取り後に、本来の回廊基壇縁よりも南に設けられている。



第15図 基壇外周遺構検出状況(2)

1 北階段東隅 2 B期地覆・羽目石とC期羽目石の重複 3 回廊取り付き部・東 4 同西



第16図 基壇外周遺構（東半）変遷図（1:40、上段 B期、下段 C・D期、写真は北東より）

中門および南面回廊が、創建から今日にいたる過程で7度の火災と6度の再建を重ねたことはすでに述べた。こうした火災の痕跡は、基壇上あるいは外周において少なからず認められたが、必ずしもすべてについて成層的なありかたを示すものではなかった。これは、伽藍の中心に位置する中金堂院という建物の性格、火災後の清掃、あるいは平坦地の堆積環境等によるものと考えられる。また、火災による被害の程度などとも関わってこよう。

今回の調査では、基壇および基壇外装の複数回にわたる改修と、その重複関係を確認した。このなかにはC期とD期のように層位的な関係として把握されたものもある。遺構の状況および出土遺物から、各時期を再建の経過に照らして以下のように捉えておきたい。

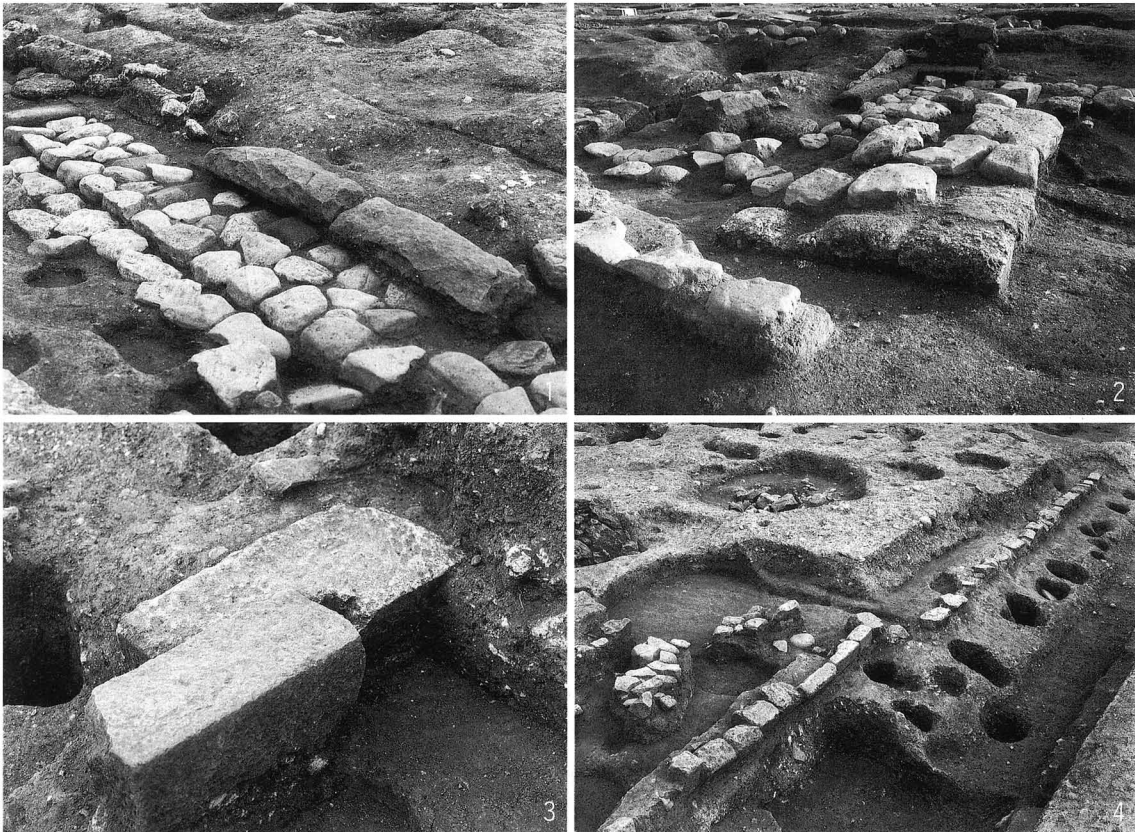
A期 現在最下層で確認できるB期遺構に改修の痕跡があることから、創建期とする。

B期 壇正積基壇の一部である地覆石・羽目石SX7418。犬走SX7419。雨落溝SD7420。玉石敷SX7421。据付け掘形に焼土を含み火災後の改修による。永承から治承の再建期。後述するように、SX7421と重複する瓦溜SX7426は創建期の瓦を含む。

C期 凝灰岩羽目石の据えなおし。雨落溝SD7420側石の抜き取りと、凝灰岩切石を玉石敷SX7421の上に据える。治承の大火後の建久の再建期。

D期 花崗岩切石をもちいた基壇外装の改修。外周の不揃いな玉石敷。基壇最上層の基壇土積みなおし。足場SS7425。応永再建期。なお、東金堂では、花崗岩による現基壇外装を応永再建時のものとする（国宝興福寺東金堂修理事務所『国宝興福寺東金堂修理工事報告書』1940）。

E期 花崗岩基壇外装をすべて抜き取ったあとに設けられていることから、享保の火災後であろう。



第17図 基壇外周遺構検出状況(3)

1 D期羽目石 2 C期切石とD期玉石の重複 3 南階段地覆石の重複 4 E期石列SX7438

### (3) 回廊内の遺構

調査区北半にあたる回廊内は、表土から、黒褐色土、褐色土、茶灰色土の堆積がみられ、約40～50cmで、凝灰岩片を含む黄色砂による整地面に達する。この整地面で検出された遺構には、瓦溜、廃棄土坑、地鎮遺構、柱穴列、小穴群などがある。

瓦溜SX7426・SX7427 いずれも、西側回廊SC7417の北で検出した瓦溜である。SX7426は、北はおおむね雨落溝の西延長を限りとし、南端および東端はB期の玉石敷SX7421と重複する(第18図1)。南北1.6m、東西3.3m分を検出した。西端は調査区外へさらに広がる。創建期の軒瓦を含む。SX7427は、回廊基壇縁から約4m北に位置する。南北2.5m、東西3.0mの範囲で検出した。西端は調査区外へ続く。永承の火災以降で治承の兵火以前の軒瓦を含む。両者は、平面位置は近接するが、SX7426を埋め整地した黄色土を間層として上下関係にある。SX7426は、永承の火災にともなう瓦の廃棄、SX7427は、治承の火災にともなう瓦の廃棄遺構である可能性が高い。

廃棄土坑SK7433～7436 中門および南面回廊基壇の周囲には、瓦および基壇外装の石材などを投棄した廃棄土坑が複数認められた。SK7434は、中門基壇東北隅で検出した長さ1.8m、幅0.8m、深さ0.78mの船底形の土坑。B期の羽目石と考えられる切り欠きをもつものなど基壇外装の凝灰岩切石が出土した(第18図2)。SK7435は、西側回廊SC7417の南辺で検出した幅1.4m、深さ0.46mの土坑で、南端は調査区外に続く。埋土からは凝灰岩切石、創建期軒瓦が出土した。この土坑の北縁にE期の切石石列SX7438が重複する(第17図4)。また、南側階段の地覆石抜き取り痕跡の南辺にそって、多量の玉石を含む3基の土坑を検出した(第18図3)。



第18図 瓦溜・廃棄土坑検出状況

1 瓦溜SX7426(西より) 2 廃棄土坑SK7434 3 南階段地覆石痕跡と廃棄土坑



地鎮遺構SX7428 北階段北辺から北6.6m、中軸から西へ1.7mの地点において、黄色砂上の茶灰色土層から掘り込まれた径30cmの小土坑を検出した。完形の土師器小皿が21枚出土し、地鎮遺構と考えられる。小皿は3～4枚を単位として重ね合わせ、底に1枚上向きに置き、その上に下に向けて重ねたものと、穴の壁に沿って差し込まれたような状態のものがある（第19図）。

1984年におこなわれた平安宮内裏承明門内の調査で、門の北に南北に並ぶ4基の地鎮遺構が検出され、時期を違えた遺構が直線上に並ぶことから承明門の中軸を示すものとされた。これらから西に1.3mの位置で径30cm、深さ7cm、土師器の坏・皿を埋納する類似の遺構が検出されている。時期は11世紀前葉（京都市埋蔵文化財研究所『平安京跡発掘調査概報』昭和60年度 1986）。なお承明門内においても、花崗岩破碎砂の白砂化粧土をもちいた整地が確認され、『三代実録』にみえる「布沙」との関連が指摘されている。本調査区内の黄色砂整地層のありかたを考えるうえで興味深い事例である。

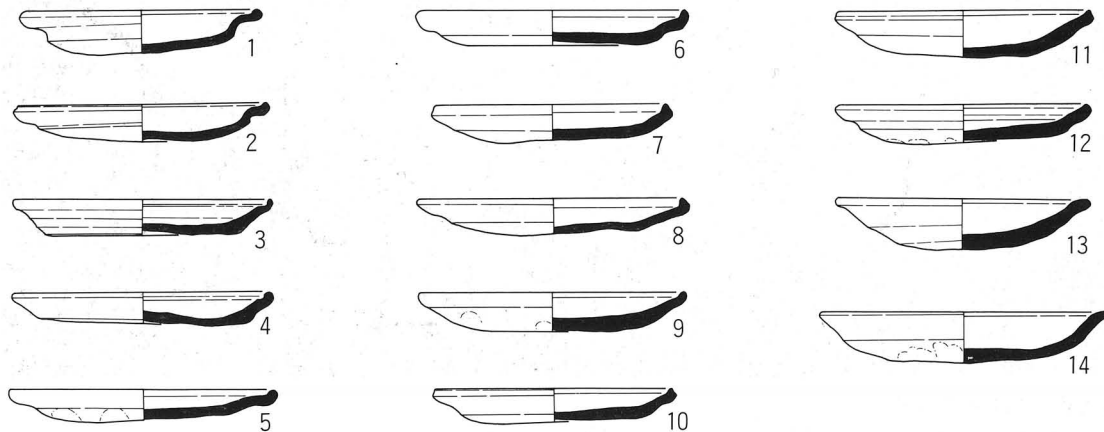
柱穴列SX7429～7431 回廊内では多数の柱穴を確認した（第20図1）。まとまりを把握できないものも多いが、中門階段正面をはさみ、その左右に並ぶ東西方向の柱穴列にSX7429～7431がある。このうちSX7430は、基壇縁から約4.6m北に位置し、ほぼ同一位置に5回の重複がある。柱間は、2.4m。柱穴内からは、10世紀から11世紀にかけての土器が出土した。

『造興福寺記』の永承3年（1048）の再建供養会の記載には、「中門内左右腋。敷式部彈正出居座。東

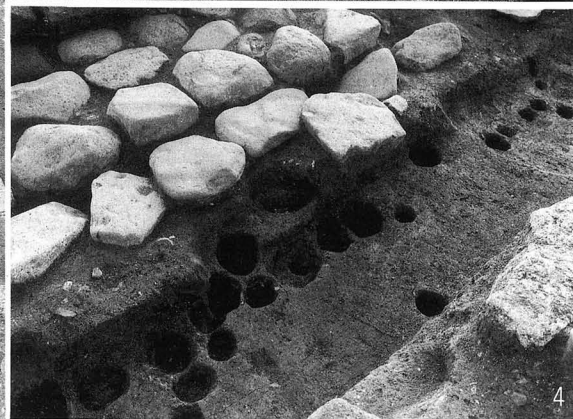
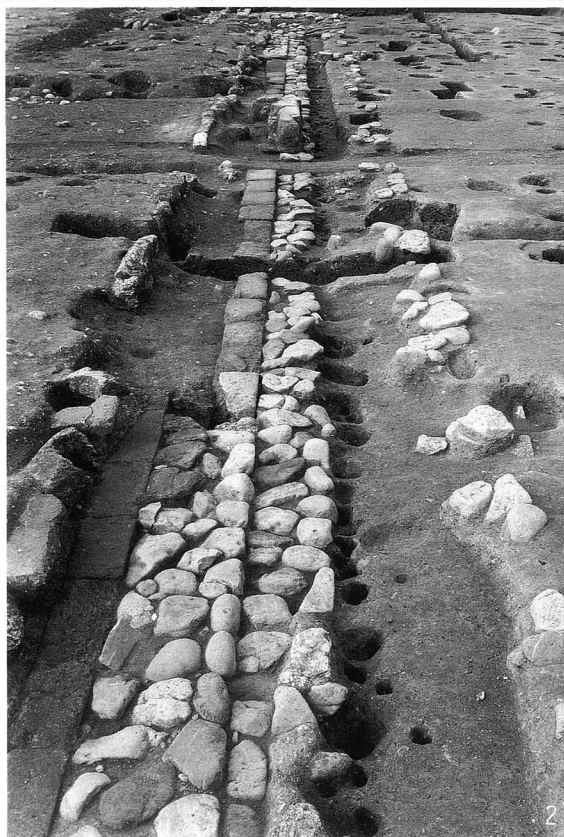


省。西臺。」とみえ、これらが、こうした法会の際に回廊内に設けられた仮説の建物、あるいは幢竿などの柱穴である可能性もあろう。

小穴群SX7432 雨落溝SD7420北側石抜取りの位置で検出した小穴群（第20図2～4）。径10cm程のものを主体とし約260の穴を確認した。打ち込みによるものと考えられ、多くが南側（基壇側）に70度前後傾いている。北に傾くものはごく僅かである。穴の深さは30～40cmで、同一箇所には3ないし4回の重複が認められる場合もある。埋土には砂および茶灰色土が含まれる。東西の範囲は中門基壇の幅に収まる。



第19図 地鎮遺構SX7428検出状況と出土土器実測図（1：3）



第20図 回廊内の遺構

1 柱穴列SX7429~7431 (西より) 2~4 小穴群SX7432

## 6 出土遺物

### (1) 瓦

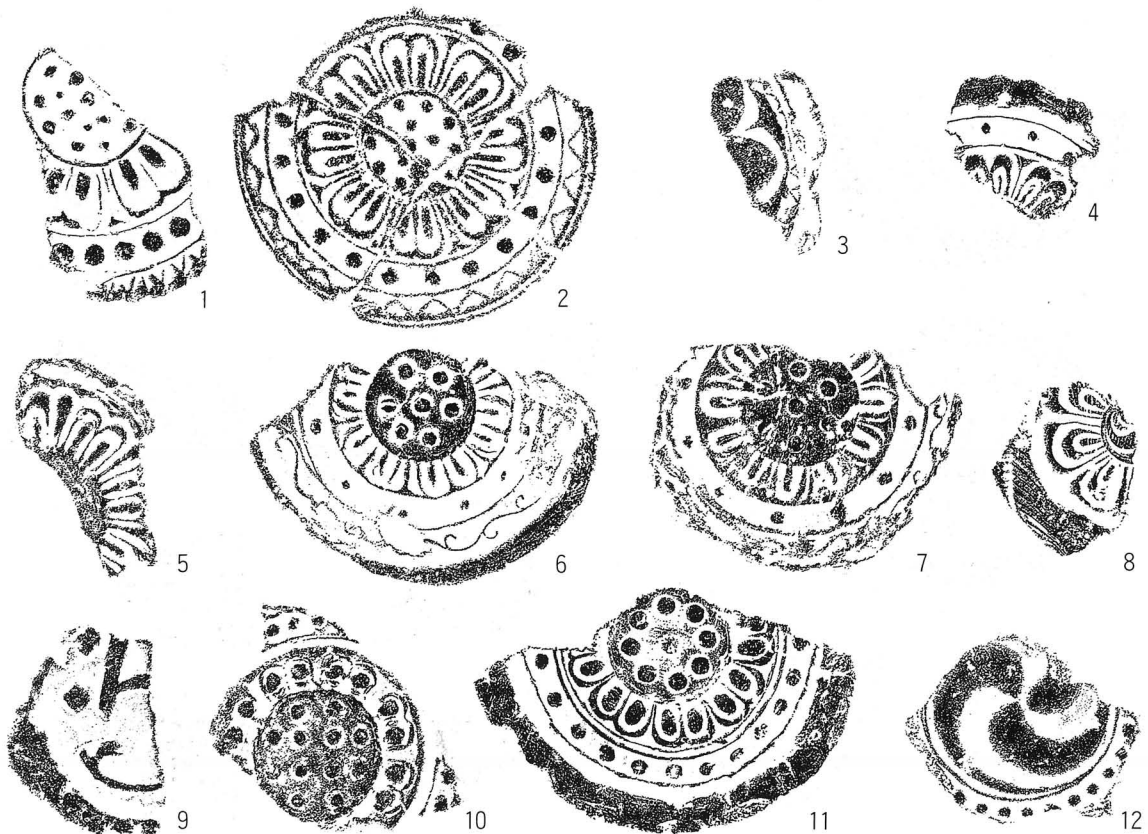
今回の調査で出土した遺物の大半は瓦である。軒丸瓦103点、軒平瓦80点、丸瓦約5000点、平瓦約12300点、鬼瓦3点他が出土した。

#### 軒丸瓦

1は6271Bで1点出土。久米寺と同範。興福寺式6301型式は11点出土。2は6301A。6301Aと認定できるものが6点あり、うち4点が瓦溜SX7426から出土した。次山淳によると、6301Aには範傷の進行したものとあるとする。本調査区出土例は範傷の少ないものである。いずれも瓦当裏面に(瓦当裏面調整の)布目痕を有する。3は線鋸歯文縁無子葉単弁の軒丸瓦。法隆寺軒丸瓦22Aと同範とされるが、現物照合を要する。以上は、興福寺創建期の軒丸瓦。

4は珠文縁、5は素文縁の複弁8弁軒丸瓦。6・7は唐草文・珠文縁の複弁6弁軒丸瓦で、瓦溜SX7427から出土。7は法隆寺軒丸瓦62Aと同範。8は中房に巴文を配する単弁8弁軒丸瓦。9は梵字文軒丸瓦。梵字アークの逆字(範型の正字)を配する。他に梵字アークの正字を配する小破片が出土している。9は新薬師寺例(法金剛院『古瓦譜』所収)と同範だろう。12は三巴左巻軒丸瓦。4～9、12は永承の火災以降で、治承の兵火以前の軒丸瓦。

10は中房に4+8の蓮子を配し、11は中房に1+8の蓮子を配する複弁8弁軒丸瓦。ともに養和再建期を代表する軒丸瓦である。13・14は中世の三巴文軒丸瓦。



第21図 出土軒瓦(1) (1:4)

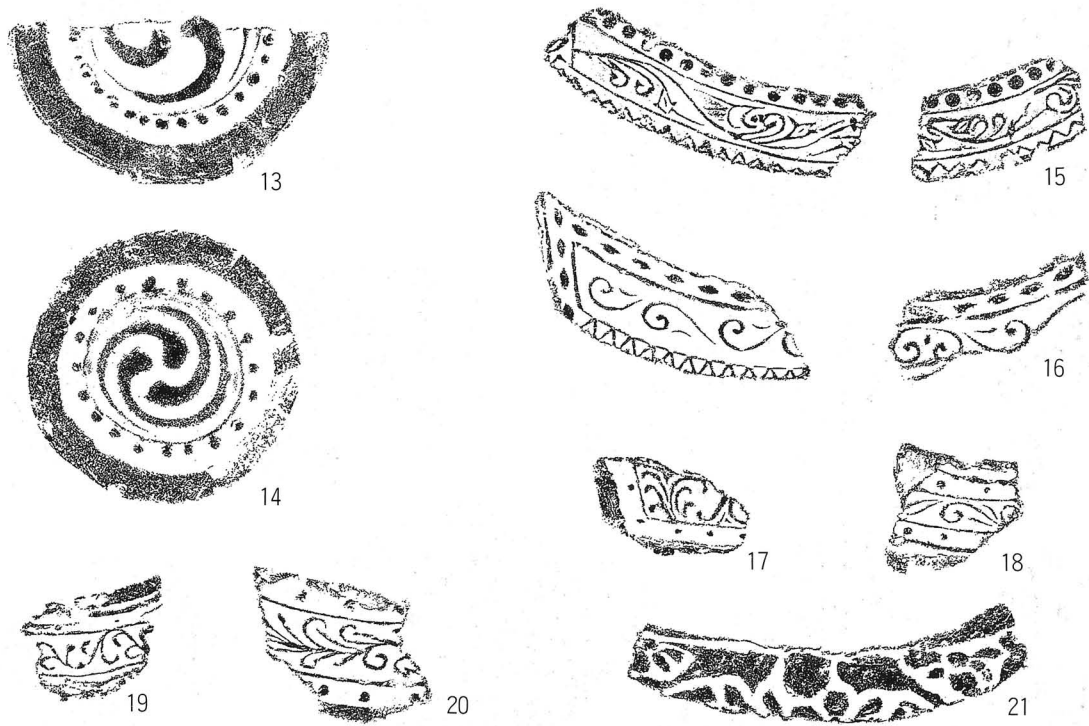
軒平瓦

15は変形忍冬唐草文軒平瓦で6645A。久米寺と同範。顎部の叩き文は、平行叩き痕の残るもの（15左半）と、縄叩き痕の残るもの（15右半）とがある。16は上外区・脇区に杏仁形珠文、下外区に線鋸歯文を配する均整唐草文軒平瓦で、6671A。興福寺式6671型式は15点出土し、6671Aと確実に認定できるものが6点あり、他も6671Aであろう。瓦溜SX7426で6点出土。顎部長が8.4cmの長いものから5cmの短いものまである。以上は興福寺創建期の軒平瓦。

17は中心飾りを有しない均整唐草文軒平瓦で6739A。西隆寺と同範で、奈良時代後半の軒平瓦。18は均整唐草文軒平瓦で、平安時代前期のもの。19は主葉と支葉が連続する均整唐草文軒平瓦。『興福寺食堂発掘調査報告』（奈良国立文化財研究所 1959、以下『食堂報告』）の28と同範。20は、主葉の巻きと支葉とを結合させ、複線で唐草を表現する均整唐草文軒平瓦。『興福寺防災施設工事・発掘調査報告書』（興福寺 1978、以下『防災報告』）の124と同範であろう。19・20とも平安時代前期の軒平瓦。

21は、瓦溜SX7427から出土した特異な文様の軒平瓦。左右両端に半截した蓮華文をおき、中央下半にも蓮華座風の文様を配する。中央上半の文様は不明だが、動物文と解するのも一つの考えであろう。範型によらないものか厳密にはわからないが、工具による切り込みが残る部分があり、手彫りと粘土貼り付けを組み合わせさせて瓦当文様を作ったものであろう。

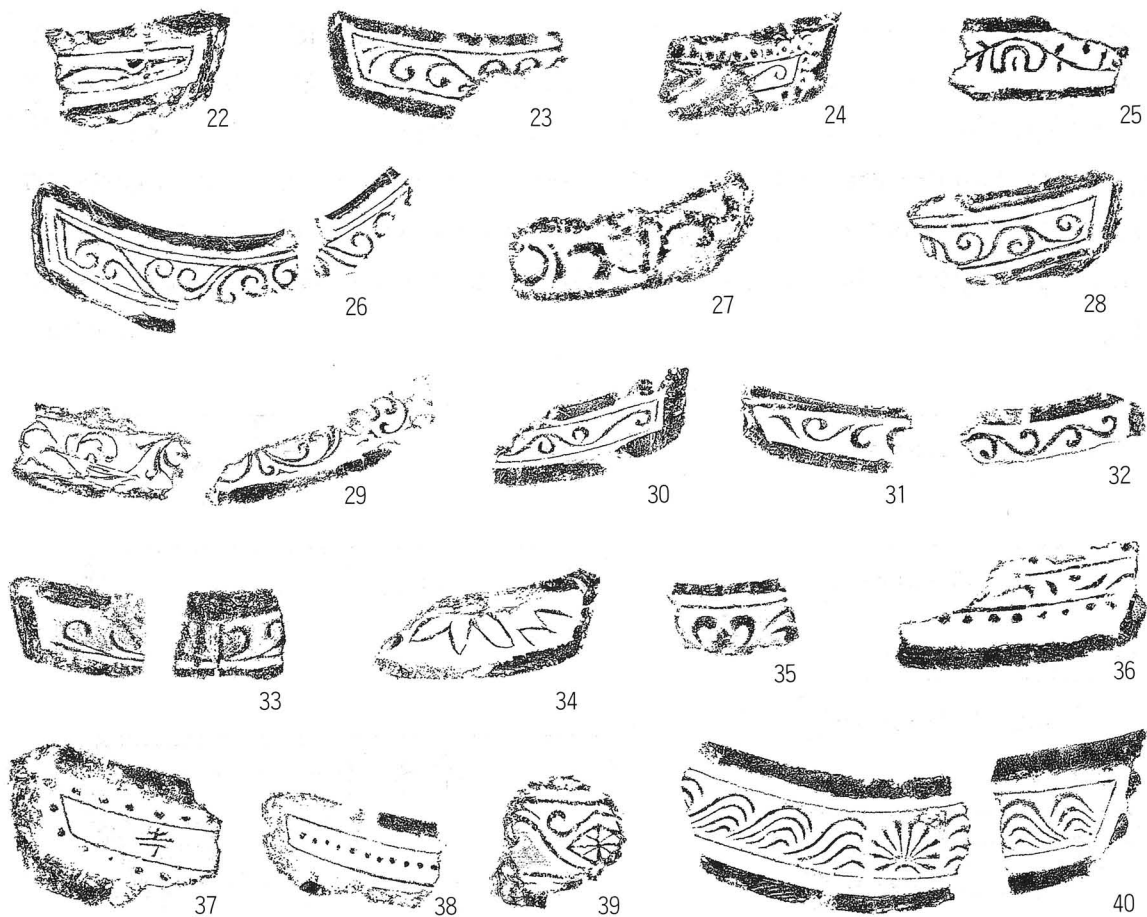
瓦溜SX7427からは、この軒平瓦と組み合う平瓦が多数出土し、そのうち全長のわかるものは13点で、27.3cmから30.6cmの間にある。凹面の布目は比較的細かく、凸面に明瞭な叩き痕はない。布の合わせ目がないことから1枚作りであろう。軒平瓦・平瓦のいずれの狭端面にも、わら状圧痕の痕跡が残り、狭端面を下にして乾燥させたことがわかる。



第22図 出土軒瓦(2) (1:4)

22・23は段顎形態の軒平瓦。22は波状文風の文様（薬師寺・興福寺「瓦又」資料）に類似するが、先端は巻き込み唐草文軒平瓦である。24は右偏行唐草文軒平瓦で、『防災報告』140と同範であろう。直線顎。25は中心飾り・主葉・支葉が連続する唐草文軒平瓦。直線顎で、平瓦部凸面は瓦当近くまでタテケズリをおこなう。26は、瓦溜SX7427出土の均整唐草文軒平瓦。『薬師寺発掘調査報告』（奈良国立文化財研究所 1987、以下『薬師寺報告』）の267と同範。薬師寺例は段顎だが、本例は直線顎で、平瓦部凸面は瓦当近くまでタテケズリをおこなう。27は線太の主葉を反転させた唐草文軒平瓦。直線顎。28は唐草が連続する軒平瓦。『食堂報告』66と同範。曲線顎。29は3回反転の均整唐草文軒平瓦。『防災報告』159と同範だが、本例は外区の圏線がなく範の切り縮めか。曲線顎。30は中心飾りのない左右に別れる均整唐草文軒平瓦。『食堂報告』62と同範。曲線顎。31は均整唐草文軒平瓦。仁和寺出土瓦（山崎信二「大和における平安時代の瓦生産」『研究論集VI』奈良国立文化財研究所 1980 第14図1）に酷似する。曲線顎。32は唐草文軒平瓦で曲線顎。33は均整唐草文軒平瓦で、『薬師寺報告』344と同範。範の両端を切り縮めている。34は木の葉文軒平瓦。『薬師寺報告』288と同範で曲線顎。35は均整唐草文軒平瓦。22から34までは永承の火災以降、治承の兵火以前の軒平瓦である。22～27（段顎と瓦当近くまでタテケズりする直線顎）が古く、28～34（曲線顎）が新しい。

36は養和再建期の均整唐草文軒平瓦だが、文様はくずれる。顎は曲線顎で古い形態をとどめる。15～36まで顎はりつけの軒平瓦。以下は瓦当はりつけの軒平瓦。37は興福寺の銘がある。38は連珠文。39は菱形唐草文。40は菊水文軒平瓦で、瓦当中央上部に菱形の刻印。東大寺と同範。（山崎信二）



第23図 出土軒瓦(3) (1:4)

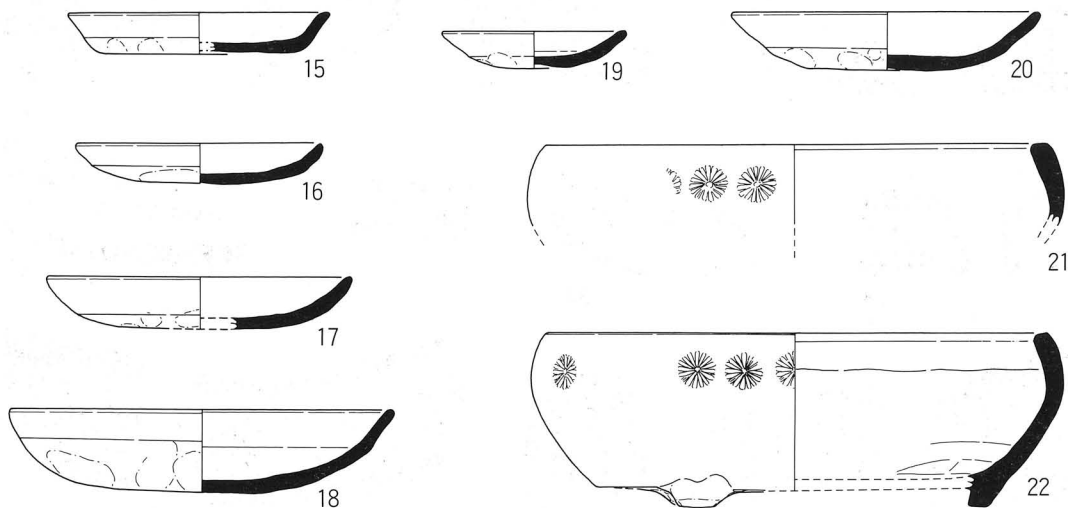
## (2) 土 器

調査区全体で遺物整理用コンテナ約20箱分の土器が出土した。古代の土師器、須恵器、緑釉陶器から備前焼の擂鉢、そして近現代の陶磁器まで各時代のものがある。

そのなかで主体を占めているのが、後に述べる地鎮的性格をもつ一括埋納土器群と同時期の土師器皿であり、微量の瓦器がともなう。これはその時期に興福寺の焼失と再建が相次ぎ、中門付近にも大掛かりな整地が行われたことを示すものである。茶灰色のこの整地土は細かく砕かれた同種の土師器片を大量に含んでおり、包含されている土器の量は、個体として取り上げた量の何倍にも達しよう。

SX7428一括埋納土器群は、基本的に「ての字状口縁」をもつほぼ似た法量の土師器皿21点からなる。このうち14点を第19図に示した。図示したものの口径は平均10cmである。また、すべて器厚3ないし4mmと、「ての字状口縁」の皿の中では厚手のものとなっている。色調は橙褐色あるいは茶褐色を呈す。細かく見ると、強く屈曲して端部を丸くおさめるもの(1・2)、屈曲した口縁内面に稜ができるもの(3・4)、屈曲は緩いが端部を丸くおさめるもの(5・6)、屈曲は弱く、端部が外側に面をもつもの(7・8)、屈曲も横ナデも弱いもの(9)、屈曲が弱く外面を一段横ナデしているだけにみえ、端部もほとんど肥厚しないもの(10~12)などがあり、一括使用の「ての字状口縁」皿のヴァリエティを把握できる好資料といえる。これらにともなって口縁端部を外に引き出すように外反する坏に似た形状の皿(13・14)が出土している。年代的には、11世紀後半を中心とする時期に比定することが妥当であるが、永承の火災の直後か、それとも永長の火災の直後のものかを断定することは難しい。状況からして、最初の大規模な整地のし直しにともなうものといえるであろう。

第24図には、この他の柱穴や土坑から出土した土器類を提示した。15は奈良時代に遡る可能性のある土師器小皿でSK7437出土。16~18の土師器と、21・22の瓦器は14世紀頃に比定できるもので、この時期のものも比較的多く出土している。このうち、2点の瓦質土器は浅鉢で、いわゆる奈良火鉢とよばれるものである。その形態や花文のスタンプなどから14世紀後半に位置づけられ、このうち21は足場SS7425の1基から出土したものである。このことから、それが嘉暦の火災後の応永の建て替えにともなうものであることが推測できる。19・20は、さらに時期が新しくなるものであろう。19は、調査区北東のSK7433出土。(高橋克壽)



第24図 出土土器実測図 (15~20 1:3、21・22 1:6)

### (3) 金属製品・銭貨

銅製品・鉄製品が、基壇周辺の焼土層を中心に出土した。銅製品には、垂木先金具、飾り金具、鋌などがあり、鉄製品には、釘、鏝、手斧刃状品などがある。

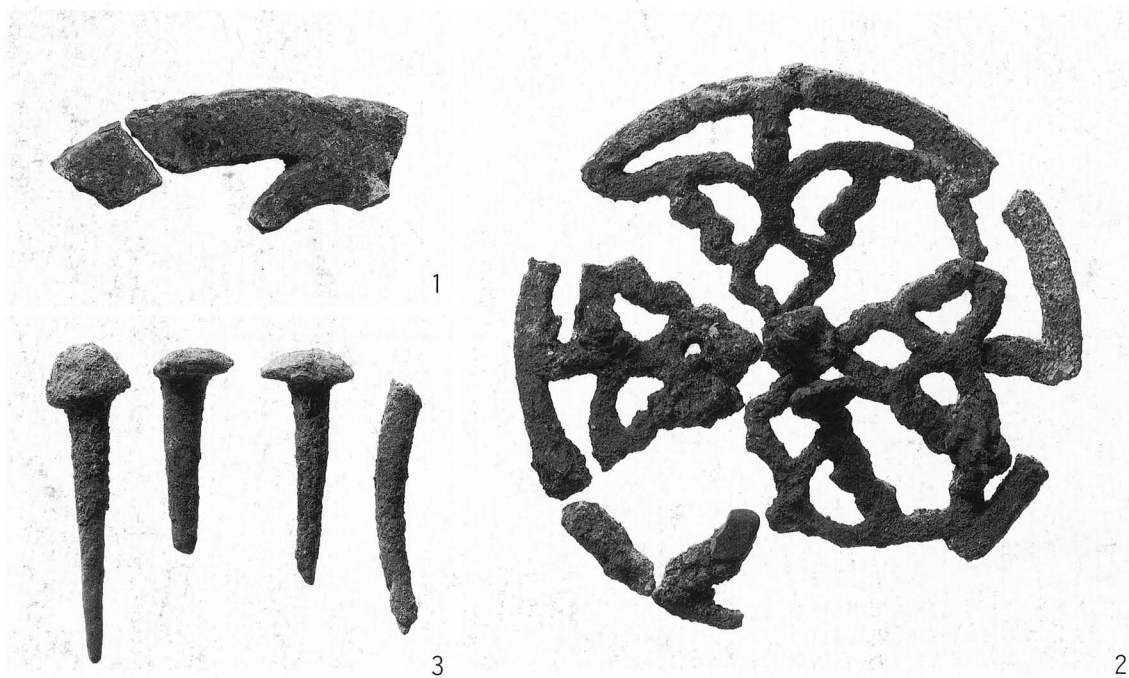
銅製垂木先金具は、円形のもの2種類確認された。1つは、外縁部の破片で、現存長5.6cm、復原径が14.5cm、厚さ2.3mm。薬師寺金堂跡出土の対葉形唐草文を表現したものと類似する(第25図1)。

いまひとつは、径12.5cm、厚さ2.5mm。1つの対葉花文と2つのC字唐草文を組み合わせて三角形の花弁を表現し、この花弁4枚を内向きに配列し宝相華を構成する(第25図2)。柱に留めるための釘穴は中心に設ける。大官大寺・薬師寺など飛鳥・奈良時代の垂木先金具は透彫りと線刻によって文様を表現するが、本例に線刻はなく透彫りのみで文様が表現されている。また、その文様自体も比較的細い線によって表現されている。こうした表現の垂木先金具は、京都府宇治市平等院鳳凰堂、岩手県平泉町中尊寺金色堂の事例がある。対葉花文とC字唐草文による三角形の花弁表現と類似したものには、平安宮豊樂殿出土の垂木先金具、興福寺北円堂寛治再興の埋納品があり、このうち前者は三角形花弁4枚を内向きに配し宝相華を表現したものである。これらの事例およびB期の地覆石上の焼土層中より出土したことから、本例は11世紀から12世紀の所産と考えられる。

なお、『興福寺流記』に「上二記(宝字記・延暦記)架端皆用金泥裁銅」とあり、垂木先金具の出土はこの記述と一致する。中金堂は「大小垂木端并高欄用裁金銅筋」、南大門は「加端。皆用裁金銅」とあり、中門の場合と用語のうえで違いがあるが、古代の用例では、普通のタルキを「架」、大柄のタルキを「垂木」とする書き分けが認められるという(福山敏男「正倉院文書に見える建築用語」『正倉院年報』第8号 1986)。

銅鋌は、破片も含めて6点出土した(第25図3)。長さは完形のもので4.7cm。鋌頭を山形にまるくつくるものと、扁平で平面卵形につくり脚の位置を中心からややずらすものがある。

銭貨は表土および褐色土中より、永樂通宝1点、寛永通宝22点出土した。(加藤真二・次山淳)



第25図 出土金属製品

## 7 ま と め

- 1 興福寺伽藍中枢部の平坦地は、大規模な寺地造成によって形成されたことが指摘されてきたが、中門地区に関しても、その東半部で地山の切り土による造成を確認した。
- 2 中門基壇の遺存状況は良好とはいえないものの、計3基の礎石が基壇上に残り、抜き取り穴を含め礎石位置を確定することができた。このことにより、従来文献・絵画資料および地表観察にもとづいて検討されてきた中門の平面規模が明らかになり、中門の建物が、桁行5間78尺、梁行は2間28尺であったことが判明した。『興福寺流記』に、中門は「長七丈八尺、広二丈八尺」、桁行の柱間は「五間」とあり、これと一致する。興福寺の度重なる再建の特色のひとつに、奈良時代とほぼ同じ規模を踏襲して、それぞれの建物の復興をおこなってきたことが指摘されてきたが、中門についても同様のことがいえる。
- 3 基壇北側外周の遺構は遺存状態が良好であり、基壇および基壇外装について大きく5期に区分される改修・重複のありかたを確認した。確認した最下層B期の基壇外装は凝灰岩による壇正積基壇である。遺構の状況および出土遺物から、中門・回廊あるいは中金堂院について知られる罹災と再建の経過に照らせば、A期を創建期、B期を永承<sup>1048</sup>から治承<sup>1067</sup>再建期、C期を建久<sup>1194</sup>再建期、D期を応永再建期、E期を享保の火災以降に対応させることができる。<sup>階</sup>
- 4 中門の安置像については、文献および絵画資料から知られていたが、従鬼像台石SX7424が原位置で発見されたことは、安置像のありかたを検討するうえで重要な材料となるといえる。



第26図 上空からみた興福寺の伽藍と調査地



## 報告書抄録

ふりがな	こうふくじ だいいっきけいだいせいびじぎょうにともなうはつくつちょうさがいほういち							
書名	興福寺 第1期境内整備事業にともなう発掘調査概報 I							
副書名								
巻次								
シリーズ名								
シリーズ番号								
編著者名	次山 淳・田辺征夫・山崎信二・高橋克壽・高妻洋成・古尾谷知浩・西山和宏・加藤真二							
編集機関	奈良国立文化財研究所							
所在地	〒630-8577 奈良県奈良市二条町2丁目9-1 Tel 0742-34-3931							
発行者	興福寺							
所在地	〒630-8213 奈良県奈良市登大路町48番地 Tel 0742-22-7755							
発行年月日	西暦 1999年9月30日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° ' "	東経 ° ' "	調査期間	調査面積 m <sup>2</sup>	調査原因
		市町村	遺跡番号					
こうふくじ 興福寺	ならけんならし 奈良県奈良市 のぼりおおじちよう 登大路町	29201	—	34度 40分 48秒	135度 51分 46秒	1998.10.2 ) 1999.1.21	841.5	境内整備
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
興福寺	寺院	奈良時代 ) 江戸時代	中門 回廊 瓦溜 廃棄土坑 地鎮遺構 柱穴列	瓦 土師器・瓦器 金属製品 銭貨		中門・南面回廊基壇を検出し、建物規模を確定した。改修の状況も確認した。		



---

1999年9月20日 印刷  
1999年9月30日 発行

興 福 寺

第1期境内整備事業にともなう発掘調査概報Ⅰ

編 集 奈良国立文化財研究所  
発 行 興 福 寺  
〒630-8213 奈良市登大路町48番地  
印 刷 (有)関西プロセス

---

